

関西大学東西学術研究所研究叢刊27

道教・民間信仰における元帥神の変容

二階堂 善弘

関西大学出版部

序

われわれ日本人は八百万の神々を祀り、様々な機会を捉えて祈りを捧げる。中国の人々もまた、それに勝るとも劣らず多くの神々を祀り、様々な形でその信仰を表明している。

中国の道教や民間信仰に表れる神々は複雑多岐にわたり、その神々の由来や来歴を探り、永い時の流れの中での変遷を跡付け、その実像について体系的に語ることはそう生易しいことではない。それには、多彩な道教の経典や文献の精査・体系化と、民間信仰について語る白話小説や戯曲の綿密な分析・検証などが求められる。そのため、この方面の研究に手を染める日本の研究者は非常に少なかった。しかし、ここに、その困難な研究に携わり、緻密な文献の検証と明晰な分析によってわれわれに中国の神々について語る適任者を得、その研究成果の恩恵に浴することができることになった。

著者の二階堂善弘氏は、民間信仰や道教の研究を専門とするが、通俗文学にも造詣が深く、両面から中国における宗教の実像に迫る能力を具えている。さらに、中国大陸や台湾の現地調査も行い、現代の宗教・信仰の実態にも通曉しており、まさに鬼に金棒である。本書では、氏は武神である元帥神を取り上げ、それに関する基本資料として、道教側からは『道法会元』、『法海遺珠』を、民間信仰側からは『三教源流搜神大全』、また通俗文学の側からは『封神演義』、『西遊記』などを取り上げて多面的に論じ、この方面の研究に新境地を開いてみせた。その成果は斯界に裨益するところ大であると確信する。また、その成果のかなりの部分が東西学術研究所の研究員としての活動の中から生み出されたものであることは、研究所にとっても誠に喜ばしいことである。

平成18年9月

関西大学東西学術研究所

所長 橋本 征治

目 次

前言——中国における神信仰の変容と元帥—— 1

第一章 通俗文学作品と元帥神 15

1. 通俗文学作品に見える元帥神 15
2. 『宣和遺事』と『武王伐紂平話』 15
3. 『平妖伝』『三宝太監西洋記』における元帥神 19
4. 四大奇書における元帥神 22
5. 『四遊記』に見える元帥神 27
6. 『封神演義』の二十四天君及び他小説に見える元帥神 33
7. 元明の雑劇に見える元帥神 37
8. 通俗文学作品に登場する元帥神の特色 41

第二章 『三教搜神大全』の構成 49

1. 三種の「搜神」資料 49
2. 三種の資料の成立について 50
3. 三種の資料の影響関係 60
4. 『三教搜神大全』増補の項目群 65
5. 『搜神記大全』の項目群の編成 70

第三章 道教における元帥神 77

1. 雷法の発展 77
 2. 神霄派の雷霆神 81
 3. 北極四聖について 83
 4. 天心法と浄明道系統の法術 90
 5. 宋元の儀礼書における神将 96
 6. 白玉蟾の論議について 105
-
-

-
-
7. 清微派の經典における雷神 108
 8. 『道法会元』と雷法の系譜 110
 9. 『道法会元』における元帥（一）
——清微・神霄系法術 120
 10. 『道法会元』における元帥（二）
——神霄系諸派及び天心・地祇・酆都系など 135
 11. 『法海遺珠』に見える元帥神 147
 12. その他の元帥に関わる經典について 154
 13. 道教における元帥神信仰の發展 154

第四章 元帥各神考 _____ 165

1. 『三教搜神大全』の各神の項目 165
2. 関元帥と解州塩池故事 165
3. 雷部諸天君の姓名 171
4. 殷元帥太子出身説話 176
5. 馬元帥華光と五顯神 180
6. 温元帥及び十太保 189
7. 玄壇趙公明の記事について 200
8. 王靈官と薩真人の故事 206
9. 清源妙道真君について 216
10. 呉客三真君と祠山張大帝 220
11. 天妃に関する記事の特色 226
12. その他の元帥神について 230
13. 儼戯と元帥神 232

結語 ——元帥神の起源と変容—— _____ 247

後記 _____ 253

前言 ——中国における神信仰の変容と元帥——

宗教信仰は、伝統を重んずる一方で、同時に絶えず変容を蒙るものである。

現在、中国各地の寺廟において祭祀される神々は、唐以前の記録には見えないものが多い。また唐より前の資料に見えるものであっても、現在ではその形象が大きく変容しているものが大半であると言ってよい。

例えば、関帝・八仙・媽祖・玄天上帝・二郎神などの神々は、唐以前に神として祭祀されていたとする資料はほとんどないか、あったとしても非常に少ない。これらの神の信仰が隆盛に向かうのは、元代以降のことである。また民間信仰に限らず、仏教の仏菩薩、例えば観音菩薩や弥勒菩薩なども、元代以降には大きくその姿を変えている。

それでは宋から元代にそういった形象が定着したのかと言えば、それも単純にそうと片付けられない。一例として八仙を挙げるなら、呂洞賓をはじめとする八仙は、元代においても人員が確定せず、結局は明末に至って始めて、現在も見られる姿となる。すなわち李鉄拐・漢鍾離・呂洞賓・張果老・韓湘子・藍采和・何仙姑・曹国舅の八名である。元代の記録では、何仙姑や曹国舅が抜けて、むしろ徐神翁や張四郎といった現在では知られていない神仙が入る場合が多い¹⁾。このように、明末に至ってようやく形象が固まるという例もある。

さらに、明末以降においても神々の形象は変化する。この点で大きな役割を果たしたのは小説『封神演義』である。この小説は神々の由来を説いたもので、小説自体よりも、語り物や芝居にアレンジされて、民衆の間に大流行した。そのために、現在の民間層における神々のイメージは、『封神演義』の影響を強く受けている。例えば哪吒太子は、現在の大半の廟では、風火輪に乗り、槍と輪と布を持つ姿を祀るのが一般的であるが、『封神演義』以前ではこのような形象はほとんど見られない²⁾。『封神演義』が流行することにより、神像の形象までもが影響を受けて変化したのである。また『西遊記』

も、同じようにながりの影響力を持った。台湾やシンガポールなどの各地の民間信仰で、孫悟空を齊天大聖として祀るのは、もちろん『西遊記』の流行以前にはなかったことである。

但し、『封神演義』がすべての神々のイメージに影響を及ぼしたかという点、これも一面的なものでしかない。例えば三目を持つことで有名な二郎神であるが、『封神演義』やそれ以前の形象では、二眼に描かれている。その衣冠も、現在のよく知られている姿と、『封神演義』のものとはかなり異なる。

また、華光神のように、元明代に閔帝に勝るとも劣らぬほどの盛んな信仰を有しながら、清代において信仰が衰えた神もある。

つまり現代祭祀される神々の多くは、極めて大雑把に述べるならば、唐代以降に発生し、宋から元にかけて信仰を發展させ、明代にその形象を大きく変容させ、そして清代において定着していったものである。むしろ、それぞれの神々の信仰の發展と変容については、当然のことながら大きな差異が存在する。

しかしその中でも特に重要なのは元から明代における信仰の変化であろう。多くの神々の信仰や形象は、この時期に大きく変化し、明末から清代へとつながっていく。

ところが、この時期の神々の変容については不明確な部分が多い。随筆や類書、また通俗文学作品などに見えるこれらの神々の記載は、断片的なものに過ぎないし、また道教經典においては、『道法会元』³⁾など一部の資料を除いては非常に少ない。これは『正統道蔵』の編纂された明末までに、新興の神々が、まだ道教神としての十分な地位を獲得していないということが反映している。

神々の信仰に関しては、早期には清の趙翼が『陔余叢考』⁴⁾において様々な角度から考察を行い、さらに黄裴黙が『集説詮真』⁵⁾において、民間信仰に対して批判的な立場から、その由来や変遷について検討する⁶⁾。これらの多くの研究を踏まえて出されたのが、呂宗力・樂保群両氏の『中国民間諸神』であった⁷⁾。この書は『集説詮真』における文献蒐集と考証とを拡充する形

で神々の発展の過程を明らかにした画期的な著作であり、民間信仰研究の最も基礎的な資料となった。また王秋桂・李豊楙両氏の編になる『中国民間信仰資料彙編』⁸⁾も、『集説詮真』などを含め、『神仙鑑』や『古今図書集成』の「神異典」など、重要な文献を網羅する。これらの書の出版によって、中国の民間信仰研究は飛躍的に進展する土台を得た。

しかし、『集説詮真』にしろ、『中国民間諸神』にしろ、多くの神々の考証において、最もその依拠していると考えられるのは『三教源流搜神大全』（以下『三教搜神大全』⁹⁾と称す）である。何故なら、元から明という、その信仰が発展した最も重要な時期において、神々についてまとまった記載を残す書物は他にないからである。これは、『中華道教大辞典』¹⁰⁾のような、道教サイドに重点を置いて編集された資料においても同様である。

むろん、一方で『三教搜神大全』に記載のない神も多く、また『封神演義』のような、より民間のサイドに傾斜した資料も存在する。それにしても民間信仰を研究する上での『三教搜神大全』の重要度は変わらない。

ただ、これまで『中国民間諸神』などの研究書においては、『三教搜神大全』より以前の資料との比較や、『三教搜神大全』記事そのものの形成については、あまり注意されてこなかった。特に、道教側に『道法会元』という重要な資料があるにもかかわらず、その関連性についてはこれまでほとんど検討の対象になっていない。

本書の目的は主として『三教搜神大全』などの資料に見られる神々のうち、特に「元帥」と呼ばれる一連の神格について、『道法会元』『封神演義』などの諸資料と比較することによって、その変容の過程を探るものである。また併せて『三教搜神大全』それ自体の性格について検討する。何故なら、元帥神が後に発展した関帝や趙玄壇や王霊官といった神々は、現在でも多くの寺廟において盛んに信仰されており、その信仰の変容について調査することは、現代の宗教文化を解明するためにも重要であると考えられるからである。

ここでまず、元帥神という武神について考えてみたい。

「元帥」という称号は、一般的には軍隊における統率者を指し、民間信仰

においては、上位の武神を意味するものとされる。類似の称に「將軍」がある。

「將軍」の称については、すでに『上清金真玉皇上元九天真靈三百六十五部元録』¹¹⁾などの符籙類の經典に見えている。早期の道教經典においては、信者を守護する役割を担った神を「將軍」や「功曹」「使者」と称することが多い。また『四斗二十八宿天帝大籙』¹²⁾などのやや後の符籙では、「功曹」「靈官」「將軍」「天丁」「力士」なども使われている。ただこれらの武神が「元帥」と呼ばれることは少ない。

「元帥」の称号自体は『春秋左氏伝』¹³⁾にも見え、既に軍隊の上位者を指す称として使用されている。『新唐書』の「百官志」には官名としての「元帥」が見え、隋唐以後では、多く官名として使用されるようになる。特に金と元における事例が著しい¹⁴⁾。このような傾向を受けてか、元明の雜劇においては、漢初の韓信にしろ、三国の孫堅にしろ、歴史事実を無視した形で、軍の統率者を「元帥」と称する¹⁵⁾。民間信仰における元帥号の発展は、恐らくこういういった通俗文芸の傾向とも無関係ではないだろう。

ただ元帥神の発展は、宋代以降に発展した雷法と密接な関わりを持つ。すなわち、雷法によって使役される神々をもっぱら「元帥」と呼び、またその法術を「元帥法」と称することが多いからである。むろん、雷法においては雷神を使うことが中心となるが、雷神イコール元帥というわけではない。元帥神は「雷部」という天界の役所に所属することが多いが、この他にも火神の属する「火部」、水神の属する「水部」などの役所もある。これら火部や水部の神も、元帥神とみなすべきである。

またこの他にも、元帥神には、「靈官」「天丁」「天君」「使者」「大將」「太保」など様々な称がある。やはり武神にかかわる称であり、またこれらの称号はその神の職種と結びついていることが多い。「天君」や「使者」は、天界において雷部に属する神々に対して使用される。但し、一つの神が二つの称号で呼ばれる場合も多く、「王靈官」は同時に「王元帥」と呼ばれ、「温太保」は同時に「温元帥」と称されることもある。

本書において「元帥神」と言う場合、これらの種々の名で呼ばれる武神を

すべて含むものとする。すなわち、五代・宋以後に発展したと思われる、新しい種類の武神である。より具体的には、鄧天君・辛天君・張天君・陶天君・龐天君・劉天君・苟天君・畢天君・温元帥・関元帥・馬元帥・趙元帥・岳元帥・殷元帥・王靈官などの神格を指すものとする。

これらの元帥神の形象には特徴がある。例えば、王靈官や馬元帥などは三眼を持ち、また鄧天君などは鋭い爪と嘴と、背には羽を持つ。さらに幾つかの元帥神は、三頭六臂などの異形を有している。元帥神は特定の武器を有するのが一般的で、関元帥なら「青龍刀」、趙元帥なら「鉄鞭」、馬元帥なら「金磚」、温元帥なら「狼牙棒」という形である。また関元帥は赤兔馬、趙元帥は黒虎に座すなど、その騎獣も特徴的である。



鄧天君（武当山太和宮蔵）

いまでも各地で行われている道教や民間信仰の儀礼の諸処に、これらの元帥神は深く関わるようになってきている。例えば、現在の台湾の道教儀礼においては、次のような元帥神を招請する¹⁶⁾。

上清天枢院火急天蓬都大提拳元帥 尹元帥
 副總管獬豸 吳元帥
 北極驅邪院大聖天罡都統 趙元帥
 大力天童副統 劉元帥
 雷霆剡火律令大神炎帝 鄧天君
 玉府大都督青帝判官 辛天君
 先天一炁火雷使者暘谷 張天君
 雷門 龐·劉·苟·畢四大元帥
 三山木郎大神
 嘶風舞雨大神廻轉 轟使者
 玉清 總召邵陽雷公八大秘將
 五方斬勘使者
 華·璧·蔣·雷·陳五大雷神
 五方蛮雷使者
 (略)
 雷霆響報 劉元帥
 洞玄奏告 劉天君
 九州社令陽雷 康·劉·呂三使者
 天神龍水社五大雷神
 上清正一玄壇 趙元帥
 酆都朗靈院馘魔上將 闕聖帝君
 泰山英烈 康元帥
 三天持奏 謝·白二元帥
 斗口魁神靈官 馬元帥
 神威豁落玉壇總管 王元帥
 地司太歲至德武光 殷元帥
 地祇翊靈昭武上將 溫元帥
 溫·李·鉄·劉·楊·康·張·岳·孟·韋 十大保
 火犀雷府管打不信道法 朱元帥

崔・盧・鄧・竇四大元帥
三元 唐・葛・周三大將軍
玄樞 楊・耿・方三使者
解呪詛使者 顯元帥
北斗 捲廉大將軍
糾察応報 曹使者
北斗君臣使者
九天魁罡黃龍奪命 金元帥
北魁玄範府升天入地 鉄牛大將
陰府 魯元帥
神虎 何・喬二大將軍
九天衛孩催生保産 鄧・趙二金剛元帥
監生 高元帥
青婁 陳大神
靈宝大法司天將天兵都司典史 趙大將
天医朗靈院 高・許・陶・趙四大元帥

また、例えば四川の道壇の儀礼においては、次のような元帥神を招請する¹⁷⁾。

主壇三十二天雷霆大都督炎帝 鄧天君
副壇八十一天雷霆都総管青帝 辛天君
先天一炁火雷使者 張天君
(略)
八卦洞神 龐元帥
刷鞭走火 劉元帥
左伐魔使 苟元帥
得伐魔使 畢元帥
先天首將 王天君

斗口靈官 馬元帥
 地神霄主令 趙元帥
 地祇上將 溫元帥
 皇門太保 康元帥
 地司太歳 殷元帥
 西台御史 関元帥
 火犀滅巫上將糾不信道法 朱將軍
 風輪盪鬼 周元帥
 (略)
 風火如意 田元帥
 (略)
 斗中 楊・耿二大元帥

民間信仰系の儀礼でも、例えば四川省の「祭財神」の儀礼であれば、趙元帥を中心にし¹⁸⁾、貴州省の儺戯では、秦天君・趙天君・董天君・袁天君・金天君・孫天君・柏天君・姚天君などの諸元帥の名が見える¹⁹⁾。

儀礼面のみならず、道観や廟においても、これらの諸元帥を祀るところは多い。特に全真教の道観では、ほとんど必ずと言ってよいほど前殿に王靈官を配し、これを「靈官殿」と称す。また温・関・馬・趙の四大元帥は、武当山の諸宮観をはじめとする多くの廟に祭祀される。北京東嶽廟の後殿には、明代造とされる四大元帥像を配す。蘇州の玄妙観では、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢・岳・温・殷・朱の各元帥を三清殿に祭り、これを「十二天君」とする²⁰⁾。上海白雲観においても、南京の朝天観から移送された温・趙・殷・馬・岳・王の各元帥の像を祭祀する。これらの元帥神の像は、明代の遺構をよく保存する道観に祀られることが多い。

さらに、『西遊記』や『封神演義』といった文学作品にも、しばしばこれらの元帥神が登場する。これらの元帥神は、通常では「雷部三十六天将」と称され、三十六神があるとされる。ただ、『封神演義』においては二十四の神がいるとされ、「二十四天君」と称す。その二十四天君の名称は、次の通

りである²¹⁾。

鄧天君忠・辛天君環・張天君節・陶天君榮・龐天君洪・劉天君甫・
苟天君章・畢天君環・秦天君完・趙天君江・董天君全・袁天君角・
李天君徳・孫天君良・栢天君礼・王天君変・姚天君賓・張天君紹・
黄天君庚・金天君素・吉天君立・余天君慶・閃電神（即金光聖母）・
助風神（即菡芝仙）

このように現在の道教・民間信仰において重要な地位を占める「元帥」であるが、しかし元来は道教の神体系の中には存在しなかったものと推察される。

例えば、六朝期における道教の神体系を示す『真靈位業図』²²⁾においては、元帥神に該当する神はほとんど存在しないと言ってよい。

北宋期に編纂された『雲笈七籤』²³⁾には、宋代以前の道教における神体系が詳しく示されているが、その中には元帥神に関する記載はほとんど見えない。また『道門科範大全集』²⁴⁾などの総合的な儀礼書にも元帥神らしき神はあまり登場しない。すなわち、元帥神の興起は北宋より後のことであり、また道教の体系においてはさほど重視されていなかったことが窺える。

もっとも、例えば『雲笈七籤』に「天蓬上将、太帝之大元帥也」との記載があるように、天蓬神と天猷神は、古くから「元帥」という呼称を有していた²⁵⁾。『道門科範大全集』巻七十七に見える諸神一覧においては、多くの神と共に元帥の名称も見えている。しかしここでは、特にどの元帥であるかという記載はない。

虚無元始天尊・太上大道君・太上老君・昊天玉皇上帝・勾陳天皇大帝・北極紫微大帝・南極注生上帝・東極救苦青玄上帝・承天效法后土皇地祇（略）五嶽五天聖帝・酆都地祇合干元帥・太歳土火温司（略）

唐代以前の道教においては、道教儀礼の醮において、これらの元帥神が登場

することはなかった。そもそも、元帥神の登場する「発表科儀」自体が新しいものとされる。これについては丸山宏氏の指摘がある²⁶⁾。

発奏儀すなわち発表科儀は、唐末の杜光庭の時代にはまだ存在しなかったものであり、南宋においても、地方ごとに挙行の仕方が一定していなかった新しい科目であった。(略) それらの起源は、古い靈宝斎にはもとめることができず、むしろ法官の儀礼において城隍や土地に牒を発出したり、死霊の変化した陰兵のような存在を驅邪に援用する場合に帖を発出したりする、基層的な民間信仰の客体に多く働きかけるために新しい道法が作り出した儀礼方法に由来する。

しかし一方で『道法会元』になると、一転して元帥神に関して膨大な記録が見られるようになる。『道法会元』の正確な成立年代は不明であるが、『道蔵提要』などでは、書中に第三十九代張天師の張嗣成や趙宜真や王玄真などに言及する記載が見えることから、元末明初に成立したとみなす²⁷⁾。すなわち、元末明初の時期には、元帥神は道教神として認識されていたことになる。

そして『三教搜神大全』である。この書には多くの元帥神に関する記載がある。『三教搜神大全』の項目で、元帥神に関すると考えられるものは、以下の通りである²⁸⁾。

卷三 義勇武安王

趙元帥

卷四 王元帥

謝天君

混炁龐元帥

李元帥

劉天君

王高二元帥
田華畢元帥
田呂元帥
卷五 党元帥
石元帥
副応元帥
楊元帥
高元帥
靈官馬元帥
孚祐温元帥
朱元帥
張元帥
辛興苟元帥
鉄元帥
太歳殷元帥
斬鬼張真君
康元帥
風火院田元帥
孟元帥

前にもふれたが、民間信仰における諸神の由来について述べた『集説詮真』や『中国民間諸神』では、その考察の多くを『三教搜神大全』の記事に依拠している。中でも、武神である元帥神については、研究文献の大半が『三教搜神大全』の記事を最も早いものとみなし、その記載を典拠としている。

しかし『三教搜神大全』の記事は、他書からの抜き書きの寄せ集めであることが多い。恐らくこれらの元帥神に関する記事も、本来は別の書籍からの引用であったと推察される。しかしその原典は散逸しており、現在元帥神について考察する場合は、『三教搜神大全』に残された記事に依拠せざるを得ないのが現状である。

ここで注意すべきは、『三教搜神大全』が、必ずしも当時信仰のあった元帥神のすべてを網羅しているわけではない、ということである。実際に『西遊記』や『封神演義』と比較しても、元帥神のうち、有名なものの幾つかは『三教搜神大全』にその名が見えない。例えば、雷部の首座といえ、必ず「鄧天君(鄧元帥)」が想起されるが、この神に関する項目は、『三教搜神大全』には立てられていない。つまり『三教搜神大全』のみに依拠するわけにいかない状況があるのである。しかし、これまでの研究ではこういった点については見過ごされてきたようだ。

さらに『封神演義』の流行という問題がある。

『封神演義』の物語は、『西遊記』と並んで民間に大きく広まった。それは文字を通してのものではなく、もっぱら演劇や語り物を通じて流布していったものである。しかしそれだけに、広範囲に民衆の間に浸透していった。

しかしあまりにも『封神演義』の説話が広まることによって、かえってこれが標準として扱われ、その結果それまでの神々の説話をねじ曲げていくことになった。現在、道士階層に属する者たちであっても、元帥神について「殷の太師・聞仲の配下の二十四天君である」などといった『封神演義』の説を主張する者が多いのはこのためである。

本書は、このような元帥神に関する資料の複雑さを考慮に入れた上で、道教側の資料として『道法会元』『法海遺珠』を、民間信仰側の資料として『三教搜神大全』を、さらに通俗文学の資料として『封神演義』『西遊記』などを取り上げ、その性格の違いに留意しながら、元帥神の変容について考察するものである。

注

- 1) 拙稿「『八仙東遊記』における「過海」故事の変容」(『東方学の新視点』五曜書房・2003年) 343～368頁参照。
- 2) 拙稿「哪吒太子考」(『道教の歴史と文化』雄山閣出版・1998年) 167～196頁参照。
- 3) 『道法会元』(『正統道蔵』正一部S. N. 1220) なお、本書の『道蔵』の表記には、すべてS. N. (シッパールナンバー) を用いた。

- 4) 趙翼『陔余叢考』(河北人民出版社・1990年)
- 5) 黄斐然『集説詮真』(王秋桂・李豊楙編『中国民間信仰資料彙編第一輯』台湾学生書局・1989年)
- 6) また、早期の重要な著作として、アンリ・ドレ (Henri Doré) 著『*Researches Into Chinese Superstitions*』(Kennelly訳・リプリント1987年・原版1914年刊)、ウエルナー (E. T. C. Werner) 著『*Myths and Legends of China*』(Dover・1994年リプリント・原版1922年刊) などがある。
- 7) まず1986年に一冊本の宗力・劉群『中国民間諸神』(河北人民出版社・1986年) が出され、その後、上下二冊本の呂宗力・樂保群『中国民間諸神』(河北人民出版社・改訂版・2001年) が出版された。この改訂版においては多くの記事が追加され、また画像なども写真を使用している。
- 8) 王秋桂・李豊楙編『中国民間信仰資料彙編第一輯』(台湾学生書局・1989年)
- 9) 胡孚琛主編『中華道教大辞典』(中国社会科学出版社・1995年)
- 10) ここでは主に『絵図三教源流搜神大全(外二種)』(上海古籍出版社・1990年) を使用。
- 11) 『上清金真玉皇上元九天真靈三百六十五部元録』(『正統道蔵』正一部S. N. 1388)
- 12) 『四斗二十八宿天帝大籙』(『正統道蔵』正一部S. N. 1397)
- 13) 『春秋左氏伝』僖公二十七年の条に、「作三軍、謀元帥。趙衰曰、郤穀可」とある。ここでは台湾中央研究院「漢籍電子文献 (<http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/>)」を使用して検索。
- 14) 前掲台湾中央研究院「漢籍電子文献」の「二十五史」の検索結果では、『金史』と『元史』における事例が多い。
- 15) 『孤本元明雜劇』(台湾商務印書館・1977年) 第一冊『張子房圮橋進履』、第二冊『虎牢関三戦呂布』など。
- 16) 大淵忍爾編『中国人の宗教儀礼——仏教・道教・民間信仰』(福武書店・1983年) 247～248頁。
- 17) 段明編著『四川省江津市李市鎮神霄派壇口科儀本(上)』(『中国伝統科儀本彙編3』新文豊出版公司・1999年) 231～232頁。
- 18) 王躍『四川省江北県舒家郷上新村陶宅の漢族「祭財神」儀式』(『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1993年) 33頁。
- 19) 王秋桂・庾修明『貴州省徳江県穩坪郷黄土村土家族衝寿攤調查報告』(『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1994年) 28頁。
- 20) 趙亮・張鳳林・負信常『蘇州道教史略』(華文出版社・1994年) 128頁。

- 21) 『封神演義』（人民文学出版社・1979年）992～993頁。
- 22) 陶弘景『洞玄靈寶真靈位業図』（『正統道蔵』洞真部S. N. 167）
- 23) 張君房『雲笈七籤』（『正統道蔵』太玄部S. N. 1032）、また蔣力生等注『雲笈七籤』（華夏出版社1996年）。
- 24) 杜光庭『道門科範大全集』（『正統道蔵』正一部S. N. 1225）
- 25) 前掲蔣力生等注『雲笈七籤』753頁。
- 26) 丸山宏『道教儀礼文書の歴史的研究』（汲古書院・2004年）276頁。
- 27) 任繼愈主編『道蔵提要』（中国社会科学出版社・1991年）961～962頁。
- 28) 前掲『絵図三教源流搜神大全』目次参照。